

おぎん

芥川龍之介

青空文庫

元和げんなか、寛永かんえいか、とにかく遠い昔である。

天主てんしゆのおん教を奉ずるものは、その頃でももう見つかり次第、火炙ひあぶりや磔はりつけに遇あわされていた。しかし迫害が烈しいだけに、「万事にかなない給うおん主あるじ」も、その頃は一層この国の宗徒しゆうとに、あらたかな御加護おんかごを加えられたらしい。長崎ながさきあたりの村々には、時々日の暮の光と一しよに、天使や聖徒の見舞う事があった。現にあのさん・じよあん・ばちすたさえ、一度などは浦上うらかみの宗徒しゆうとみげる弥兵衛やへえの水車小屋に、姿を現したと伝えられている。と同時に悪魔もまた宗徒の精進しやうじんを妨さまたげるため、あるいは見慣れぬ黒人こくじんとなり、あるいは船来はくらいの草花くさばなとなり、あるいは網代あじろの乗物となり、しばしば同じ村々に出没した。夜昼さえ分たぬ土の牢ろうに、みげる弥兵衛を苦しめた鼠ねずみも、実は悪魔の変化へんげだったそうである。弥兵衛は元和八年の秋、十一人の宗徒と火炙ひあぶりになった。——その元和か、寛永か、とにかく遠い昔である。

やはり浦上の山里村やまざとむらに、おぎんと云う童女が住んでいた。おぎんの父母ちちははは大阪おおさかから、はるばる長崎へ流浪るろうして来た。が、何もし出さない内に、おぎん一人を残したまま、二人とも故人になつてしまった。勿論もちろん彼等他国ものは、天主のおん教を知るはずはない。

彼等の信じたのは仏教である。禪か、法華か、それともまた浄土か、何にもせよ釈迦の教である。ある仏蘭西のジエスウィットによれば、天性奸智に富んだ釈迦は、支那各地を遊歴しながら、阿弥陀と称する仏の道を説いた。その後また日本の国へも、やはり同じ道を教に來た。釈迦の説いた教によれば、我々人間の靈魂は、その罪の軽重深淺に従い、あるいは小鳥となり、あるいは牛となり、あるいはまた樹木となるそうである。のみならず釈迦は生まれる時、彼の母を殺したと云う。釈迦の教の荒誕なのは勿論、釈迦の大悪もまた明白である。(ジアン・クラッセ) しかしおぎんの母親は、前にもちよいと書いた通り、そう云う真実を知るはずはない。彼等は息を引きとつた後も、釈迦の教を信じている。寂しい墓原の松のかげに、末は「いんへるの」に墮ちるのも知らず、はかない極樂を夢見ている。

しかしおぎんは幸いにも、両親の無知に染まつていない。これは山里村居つきの農夫、憐みの深いじよあん孫七は、とうにこの童女の額へ、ばぶちずものおん水を注いだ上、まりやと云う名を与えていた。おぎんは釈迦が生まれた時、天と地とを指しながら、「天上天下唯我独尊」と獅子吼した事などは信じていない。その代りに、「深く御柔軟、深く御哀憐、勝れて甘くまします童女さんた・まりあ様」が、自然と身ごもつた

事を信じている。「十字架くわすに懸かり死し給い、石いしの御ご棺くわんに納なめられ給い、「大地ちのちの底そこに埋うめられたぜすが、三日みかの後のちよみ返かへつた事を信じている。御ご糺きうめい明めいの喇ら叭つぱさえ響ひびき渡わたれば、
 「おん主あるじ、大おほいなる御ご威い光こう、大おほいなる御ご威い勢せいを以もて天あま下くだり給い、土つち埃ほこりになりたる人ひと々の色しき身みを、もとの靈アニマ魂まに併あわせてよみ返かへし給い、善ぜん人は天上てんぐの快け楽らくを受け、また悪あく人は天狗てんぐと共に、地獄ぢごくに墮おち」る事を信じている。殊ことに「御ご言ごん葉えつの御ご聖せい徳とくにより、ぱんと酒さけの色いろ形かたちは変からずといえども、その正しょう体たいはおん主あるじの御ご血けつ肉にくとなり変かる」尊そんいさがらめんとを信じている。おぎんの心こころは両りやう親しんのように、熱ねつ風ふうに吹ふかれた沙さ漠ぼくではない。素そ朴ぼくな野の薔ばら薇ゐの花はなを交まえた、実まじりの豊とよかな麦あ畠はらである。おぎんは両りやう親しんを失うつた後のち、じよあん孫そん七しちの養やしやう女にょになつた。孫そん七しちの妻つま、じよあんなおすみも、やはり心こころの優やさしい人ひとである。おぎんはこの夫婦ふうふと一いつしよに、牛うしを追おつたり麦あを刈かつたり、幸福きふくにその日ひを送おくつていた。勿な論ろんそ
 う云いう暮くれしの中なかにも、村むら人びとの目めに立たたない限かぎりは、断き食じきや祈き禱たうも怠おろそかした事ことはない。おぎんは井い戸と端はたの無む花はな果くわのかげに、大おほきい三み日にち月げつを仰あぎながら、しばしば熱ねつ心しんに祈き禱たうを凝こらした。この垂たれ髪かみの童どう女にょの祈き禱たうは、こ
 う云いう簡かん単たんなものである。
 「憐れんみのおん母ぼ、おん身みにおん礼らいをなし奉ほうる。流る人にんとなれるえわの子こ供ども、おん身みに叫こびを
 なし奉ほうる。あわれこの涙なみだの谷やに、柔に軟ゆうなんのおん眼がんをめぐらせ給いえ。あんめい。」

するとある年のなたら（降誕祭）の夜、悪魔は何人かの役人と一しよに、突然孫七の家へはいつて来た。孫七の家には大きな囲炉裡に「お伽の焚き物」の火が燃えさかつている。それから煤びた壁の上にも、今夜だけは十字架が祭つてある。最後に後ろの牛小屋へ行けば、せすす様の産湯のために、飼桶に水が湛えられている。役人は互に領き合いながら、孫七夫婦に繩をかけた。おぎんも同時に括り上げられた。しかし彼等は三人とも全然悪びれる気色はなかつた。靈魂の助かりのためならば、いかなる責苦も覚悟である。おん主は必ず我等のために、御加護を賜わるのに違いない。第一なたらの夜に捕われたと云うのは、天寵の厚い証拠ではないか？ 彼等は皆云い合せたように、こう確信していたのである。役人は彼等を縛めた後、代官の屋敷へ引き立てて行つた。が、彼等はその途中も、暗夜の風に吹かれながら、御降誕の祈禱を誦しつづけた。

「べれんの国にお生まれなされたおん若君様、今はいずこにましますか？ おん讃め尊め給え。」

悪魔は彼等の捕われたのを見ると、手を拍つて喜び笑つた。しかし彼等のけなげなさまには、少からず腹を立てたらしい。悪魔は一人になつた後、忌々しそうに唾をするが早いか、たちまち大きい石臼になつた。そうしてごろごろ転がりながら闇の中に消え失せ

てしまった。

じよあん孫七、じよあんなおすみ、まりやおぎんの三人は、土の牢に投げこまれた上、天主のおん教を捨てるように、いろいろの責苦に遇わされた。しかし水責や火責に遇つても、彼等の決心は動かなかった。たとい皮肉は爛れるにしても、はらいそ（天国）の門へはいるのは、もう一息の辛抱である。いや、天主の大恩を思えば、この暗い土の牢さえ、そのまま「はらいそ」の莊嚴と変りはない。のみならず尊い天使や聖徒は、夢ともうつともつかない中に、しばしば彼等を慰めに来た。殊にそういう幸福は、一番おぎんに恵まれたらしい。おぎんはさん・じよあん・ばちすが、大きい両手のひらに、蝗を沢山掬い上げながら、食えと云う所を見た事がある。また大天使がぶりえるが、白い翼を畳んだまま、美しい金色の杯に、水をくれる所を見た事もある。

代官は天主のおん教は勿論、釈迦の教も知らなかったから、なぜ彼等が剛情を張るのかさっぱり理解が出来なかつた。時には三人が三人とも、気違いではないかと思う事もあつた。しかし気違いでもない事がわかると、今度は大蛇とか一角獣とか、とにかく人倫には縁のない動物のような気がし出した。そう云う動物を生かして置いては、今日の法律に違うばかりか、一国の安危にも関る訣である。そこで代官は一月ばかり、

土の牢に彼等を入れて置いた後、とうとう三人とも焼き殺す事にした。(実を云えばこの代官も、世間一般の人々のように、一国の安危に関するかどうか、そんな事はほとんど考えなかつた。これは第一に法律があり、第二に人民の道徳があり、わざわざ考えて見ないでも、格別不自由はしなかつたからである。)

じよあん孫七を始め三人の宗徒は、村はずれの刑場へ引かれる途中も、恐れる気色は見えなかつた。刑場はちようど墓原に隣つた、石ころの多い空き地である。彼等はそこへ到着すると、一々罪状を読み聞かされた後、太い角柱に括りつけられた。それから右にじよあんなおすみ、中央にじよあん孫七、左にまりやおぎんと云う順に、刑場のまん中へ押し立てられた。おすみは連日の責苦のため、急に年をとつたように見える。孫七も髭の伸びた頬には、ほとんど血の気が通つていない。おぎんも——おぎんは二人に比べると、まだしもふだんと変らなかつた。が、彼等は三人とも、堆い薪を踏まえたまま、同じように静かな顔をしている。

刑場のまわりにはずつと前から、大勢の見物を取り巻いている。そのまた見物の向うの空には、墓原の松が五六本、天蓋のように枝を張っている。

一切の準備の終つた時、役人の一人は物々しげに、三人の前へ進みよると、天主の

おん教を捨てるか捨てぬか、しばらく猶予ゆうよを与えるから、もう一度よく考えて見ろ、もしおん教を捨てるかと云えば、直すぐにも縄目なわめは赦ゆるしてやると云った。しかし彼等は答えない。皆遠い空を見守つたまま、口もとには微笑びしょうさえ湛たえていてる。

役人は勿論見物すら、この数分の間あいだくらいひっそりとなつたためしはない。無数の眼はじつと瞬またたきもせず、三人の顔に注がれている。が、これは傷いたましさの余り、誰も息を呑んだのではない。見物はたいてい火のかかるのを、今か今かと待っていたのである。役人はまた処しよけい刑の手間どるのに、すっかり退屈し切っていたから、話をする勇氣も出なかつたのである。

すると突然一同の耳は、はつきりと意外な言葉を捉とらえた。

「わたしはおん教を捨てる事に致しました。」

声の主はおぎんである。見物は一度に騒さわぎ立つた。が、一度どよめいた後のち、たちまちまた静かになつてしまった。それは孫七が悲しそうに、おぎんの方を振り向きながら、力のない声を出したからである。

「おぎん！ お前は悪魔あくまにたぶらかされたのか？ もう一辛抱ひとしんぼうしさえすれば、おん主あるじの御顔も拝めるのだぞ。」

その言葉が終わらない内に、おすみも遙かにおぎんの方へ、一生懸命な声をかけた。

「おぎん！ おぎん！ お前には悪魔がついたのだよ。祈っておくれ。祈っておくれ。」

しかしおぎんは返事をしない。ただ眼は大勢の見物の向うの、天蓋のように枝を張った、墓原の松を眺めている。その内にもう役人の一人は、おぎんの縄目を赦すように命じた。

じよあん孫七はそれを見るなり、あきらめたように眼をつぶった。

「万事にかなない給うおん主、おん計らいに任せ奉る。」

やつと縄を離れたおぎんは、茫然としばらく佇んでいた。が、孫七やおすみを見ると、急にその前へ跪きながら、何も云わずに涙を流した。孫七はやはり眼を閉じている。おすみも顔をそむけたまま、おぎんの方は見ようともしない。

「お父様、お母様、どうか勘忍して下さいまし。」

おぎんはやつと口を開いた。

「わたしはおん教を捨てました。その訣はふと向うに見える、天蓋のような松の梢に、気をついたせいでございます。あの墓原の松のかけに、眠っていらっしやる御両親は、天主のおん教も御存知なし、きつと今頃はいんへるのに、お墮ちになっ

う。それを今わたし一人、はらいその門にはいったのでは、どうしても申し訣わけがありません。わたしはやはり地獄じごくの底へ、御両親の跡あとを追って参りましょう。どうかお父様やお母様は、ぜすす様やまりや様の御側おそばへお出でなすつて下さいまし。その代りおん教を捨てた上は、わたしも生きては居られません。……」

おぎんは切れ切れにそう云つてから、後は啜あはり泣きに沈んでしまった。すると今度はじよあんなおすみも、足に踏んだ薪たきぎの上へ、ほろほろ涙を落し出した。これからはらいそへはいろいろとするのに、用もない歎なげきに耽ふけっているのは、勿論宗徒しゅうとのすべき事ではない。じよあんな孫七は、苦にが々しそうに隣の妻を振り返りながら、癩かんだか高い声に叱りつけた。

「お前も悪魔に見入られたのか？ 天主のおん教を捨てたければ、勝手にお前だけ捨てるが好いい。おれは一人でも焼け死んで見せるぞ。」

「いえ、わたしもお供ともを致します。けれどもそれは——それは」
おすみは涙を呑みこんでから、半ば叫ぶように言葉を投げた。

「けれどもそれははらいそへ参りたいからではございません。ただあなたの、——あなたのお供を致すのでございます。」

孫七は長い間黙あいだっていた。しかしその顔は蒼あおざめたり、また血の色を漲みなぎらせたりした。

と同時に汗の玉も、つぶつぶ顔にたまり出した。孫七は今心の眼に、彼の靈魂アニマを見ているのである。彼の靈魂アニマを奪い合う天使と悪魔とを見ているのである。もしその時足もとのおぎんが泣き伏した顔を挙げずにいたら、——いや、もうおぎんは顔を挙げた。しかも涙に溢あふれた眼には、不思議な光を宿しながら、じつと彼を見守っている。この眼の奥ひらめに閃ひらめいているのは、無邪気な童女の心ばかりではない。「流人るにんとなれるえわの子供」、あらゆる人間の心である。

「お父様！ いんへるのへ参りましよう。お母様も、わたしも、あちらのお父様やお母様も、——みんな悪魔にさらわれましよう。」

孫七はとうとう墮落した。

この話は我国に多かつた奉教人ほうきようにんの受難うぢんの中でも、最も恥はずべき躓つまずきとして、後代に伝えられた物語である。何でも彼等が三人ながら、おん教を捨てるとなつた時には、天主の何たるかをわきまえない見物の老若男ろうにやくなん女にょさえも、ことごとく彼等を憎んだと云う。これは折角せつかくの火炙ひあぶりも何も、見そこなつた遺恨いこんだつたかも知れない。さらにまた伝うる所によれば、悪魔はその時大歓喜のあまり、大きい書物に化ばけながら、夜中刑場に飛んでいたと云う。これもそう無性むじように喜ぶほど、悪魔の成功だつたかどうか、作者は甚だ懐

疑的である。

(大正十一年八月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：かとうかおり

1999年1月5日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

おぎん

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>